文節中の「か」の用法

山口佳也*

(1991年3月7日受理)

一

現代語の助詞「か」は，終助詞の「か」，副助詞の「か」，並立助詞の「か」などに分けて考えるのが普通となっているが，これらは，もともと相互に無関係のものではなかったと考えられる。

筆者は，このような観点から，前稿「文節末の「か」の用法」(注1)で，副助詞の「か」のうち，文節末の「か」を取り上げ，終助詞の「か」とのつながりに着目しつつ，その用法を整理してみた。本稿では，更に，副助詞の「か」のうち，残る，文節中の「か」の用法について，考察を加えてみようと思う。

なお，全体で一語のようになった「かしら」「なんか」「とか」「だか」などについては，深く立ち入らないこととする。

二

最初に，文節末の「か」，文節中の「か」，並立助詞の「か」相互の区別について簡単に触れておく。

文節末の「か」は，前稿でも見たように，その属する文節の枠にとらわれずに，上接する一連の語句をまとめて，「～か」又は「～か～か」(注2)の形で，全体として一つの疑問的挿入句を構成するのが，その本来の働きであると考えられる。

1　校長はいつ帰ったか姿が見えない。(夏目漱石「坊つちやん」)

のようなものは，その典型的な例といえる。文節末の「か」による「～か」又は「～か～か」の中には，例えば，

2　なにかある。ほんとうになにかがそこにある。(梶井基次郎「城のある町にて」)

3　美乃は腹がくちいのか空いているのか判からない気持ちだった。(丹羽文雄「象形文字」)

のように，挿入句特有の断り書き的な性格をあいまい化させているように見えるものも存在するが，このようなものも，まだ，それぞれ「なに(である)か，(それははっきりしないが，あるものが)ある。」(注3)「腹がくちいのか空いているのか，(そのことが)判からない気持ち」のような意味あいに解釈することが不可能でなく，挿入句的な性格を全く失ってしまったとはいえない。

これに対し，

4　なにかある。ほんとうになにかがそこにある。

5　～彼女の言葉がしんじつのものであるか，それともいちじの興奮にすぎないかをみきわめようとするように，～(山本周五郎「日本婦道記」)

のような，文節の途中で用いられる「か」の場合，それによってひとまとまりにされた語句「～か」又は「～か～か」は，意味の上でも，形の上でも，2，3のような言い方とのつながりを残しながらも，下に助詞，助動詞などを伴うことによって，はっきりと文の構成要素の資格を獲得し，もはやいかにしても挿入句とはいえないものとなっている。

なお，5の場合，二つの「～か」が合わさって全体として文の構成要素の資格を獲得していることは明らかである。そこで，ここでは，二つの「か」を同列に扱えるように，5の初めの方の「か」のようなものも，文節中の「か」に準ずるものと考えておく。

ところで，文中で「～か～か」の形で用いられている「か」は，一般に，並立助詞の「か」と考えられることが多いようである。例えば，国立国語研究所編『現代語の助詞・助動詞』(昭和26年)は，並立助詞の「か」の部分に「～か～か」の項を設けて，次のような例を掲げている。

- それにも拘らず今尚正方形植か長方形植かと，田植の度に思い迷う人の多いのはどうしたことであろうか。(農，6，25)
- 田植に当って稲株を正方形に配置するか長方形に配置するかに就いての関心は，恐らく田植が行われるようになって以来の古い問題であろう。(農，6，25)
- ～，それが日本国民に対する「贈与」であるのか，日本政府に対する「貸付金」であるのかは，～(エコ，5・11，10)

また，日本語教育学会編『日本語教育事典』(昭和57年)は，「並立助詞」の項の例の一部として，「太郎か花子かが来ればよい。」「するかしないか(のうち)に」のようなものを掲げている。

しかし，本稿では，次のようなことを考え合わせて，文中で「～か～か」の形で用いられる「か」を副助詞の「か」としておく。

a　例えば，「太郎だったか花子だったかが来た。」と

*国文学研究室

いう文の場合，「太郎だったか」という疑問の表現と「花子だったか」という疑問の表現がまず存在し，その全体同士がある有機的な関係のもとに並べられているのであって，「太郎だった」と「花子だった」が「か」によって並列されているわけではない。

b　同じように「～か」を二つ以上並べる場合であっても，その関係は必ずしも一様ではない。例えば，「太郎だったか花子だったか（ともかくそのうちの一人）」「太郎だったか花子だったか（又は他の人だったか，ともかくある人）」「太郎だったかだれだったか（ともかくある人）」のごとくである。このことについては後に触れるところがある。

c　a，bで見た事実は，「～か～か」の形で用いられる「か」が，単独に「～か」の形で用いられる他の副助詞の「か」や終助詞の「か」と深いつながりをもつことを示していると思われるが，「～か～か」の形の「か」を単に並立助詞の例と見ることはそのつながりを見失うことになるおそれがある。

並立助詞の「か」の例としては，次のように，並列すべき語句を「～か～」の形で並べる場合の「か」が考えられる。

6　二度か三度はうまくいったこともある。（山本周五郎「雨あがる」）

7　娘は見えるか見えないくらいに頷いた。（井伏鱒二「本日休診」）

「～か～」の形の「か」も，「～か～か」の形の「か」と本来つながりをもつ語であることはいうまでもないが，これを，「～か」の形で用いられる他の副助詞の「か」や終助詞の「か」と直接関連づけて論ずることは，もはやできないであろう。ちなみに，6の場合，「二度か」と「三度」が並列されていると考えるのは無理である。

三

文節中の「か」によってひとまとまりにされた語句「～か」又は「～か～か」に下接する助詞，助動詞として挙げられるものは，大体次のとおりである。

a　格助詞

8　つまりぼくには，このぼくが「急患」であるかどうかが全くわからなかったわけだ。（庄司薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」）

9　自分は～何んな注文が兄の口から出るかを恐れた。（夏目漱石「行人」）

10　だが，喧嘩の勝敗は決して投げるか投げられるかにないことを彼は承知していた。（伊藤整「馬喰の果て」）

11　ともかくすぐ三越でしたか白木屋でしたかへ参りました。（夏目鏡子「漱石の思ひ出」）

12　またそれは一番から順に検番に張り出され，何番かまではお金が出る由云った。（梶井基次郎「ある心の風景」）

13　其時私は何うも何処かで会った事のある男に違いないという気がしてならなかった。（夏目漱石「硝子戸の中」）

14　如何にして異性を取り扱うべきかの修養を，斯うして叔父からばかり学んだ彼女は，何処へ嫁に行っても，それを其儘夫に応用すれば成功するに違いないと信じていた。（夏目漱石「明暗」）

15　山嵐を誘に来たものは誰かと思ったら赤シャツの弟だ。（「坊つちやん」）

b　副助詞

16　使い途があるかないかは，使ってみなければわからぬ。（山本周五郎「わたくしです物語」）

17　それからあとはどこでどうしたかも，どこで友達と別れたかもわからなかった。（山本周五郎「四年間」）

18　あの男がどんな性分か，ゆくさき望みがあるかないかくらいわかりそうなもんじゃないか。（山本周五郎「ひとでなし」）

19　それが事実であるかどうか，どこまで信じていいかさえ見当がつかなかった。（山本周五郎「落ち梅記」）

c　断定の助動詞

20　全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。（「坊つちやん」）

d　「であるか」相当の終助詞「か」

21　「君パスカルの事を知ってるか」「又知ってるかか，丸で試験を受けに来た様なものだ。～」（夏目漱石「吾輩は猫である」）

以上によると，文節中の「か」による「～か」又は「～か～か」は，文中で，大体，体言相当の資格で用いられているといえそうである(注4)。ただし，15のように，格助詞の「と」のうち，引用の「と」を下接させたものは，体言相当というより，文相当というべきかもしれない。また，

22　自分は幾らかでも家計の補いにしようとして，町家の娘などに出稽古をしているのだ，～（「日本婦道記」）

23　いつかは更に力強く起き上るだろう。（武者小路実篤「友情」）

24　なぜかなら，その式の進行ちゅうに，～（「わたくしです物語」）

のようなものも少し微妙で，副詞相当という見方もありえよう。もっとも，この種のものは，それほど多くな

く，また，ごく限られた形で見られるにすぎない。これらの点については更に検討する必要がある。

四

「～か」又は「～か～か」のうち，明らかに体言相当として用いられているものを，意味と形の上から，幾つかのタイプに分類してみる。

Ⅰ　こと・判定型

例えば，

・太郎が来るかどうかを確かめる。

という文の「太郎が来るかどうか」で問題になっているのは，「太郎が来るか」という，いわゆる判定要求(注5)の問いに対して，肯定的に答えることが可能であるかどうかということであると考えられる。この種のものを仮に「こと・判定型」と呼ぶ。実例，

25　遍路の話が真実のことかどうかは私は知らぬ。（田宮虎彦「足摺岬」）

26　中学生の部屋は私の部屋よりもなおひどかった。それは，部屋といえるかどうかもわからぬほどであった。（田宮虎彦「絵本」）

27　しかし母はひどく貴方に興味を持ったようでした。病院を訪れると，必ず貴方がもう来たかどうかを僕にたずねました。（遠藤周作「影法師」）

先に示した例のうち8，19（前者），21もこの型の例である。この型は，「～かどうか」の形をとるのが普通のようである。時に「～か」だけの形をとることもないとはいえないが，その場合でも，その後に「どうか」を補う方がよりしっくりした感じになる。(注6)

Ⅱ　こと・選択型

例えば，

・太郎が来るか花子が来るかを確かめる。

という文の，「太郎が来るか花子が来るか」で問題になっているのは，「太郎が来るか花子が来るか」という，いわゆる選択要求の問いに対してどちらを肯定的に答えるかということであると考えられる。この種のものを，仮に「こと・選択型」と呼ぶ。実例，

28　～これまでの苦難を意義あるものにするか徒労に終わらせるかはこれからの問題だ，～（「日本婦道記」）

29　とにかく準平は相手の息の根をとめるか，どうか勘弁してくれと手をついてあやまらせるかのどちらかになるまで今迄やって来た男なんだ。（「馬喰の果て」）

先に示した例のうち5，10，16，18（後者）もこの型の例である。この型は，必要な数の「～か」を並べた「～か～か…」の形をとるのが普通である。もっとも，「こと・判定型」と「こと・選択型」の実質的な境界はそれほどはっきりしているとはいえない。5，10のように，互いに一方を肯定することが自動的に他方を否定することになる二つの問いを並べた形の場合には，形の上では「こと・選択型」であっても，実質的には「こと・判定型」とあまり変わらないといえるであろう。特に，

30　三四郎は此三人の外に，まだ連が居るか居ないかを確かめようとした。（夏目漱石「三四郎」）

のような「～か～ないか」の形，16，18（後者）のような「あるかないか」の形，また，「～か否か」の形など，同じことがらについての肯定形の問いと否定形の問いを並べた形は，意味の上で，「こと・判定型」の「～かどうか」とほとんど差がないといわなければならない。

Ⅲ　こと・不定型

例えば，

・だれが来るかを確かめる。

という文の「だれが来るか」で問題になっているのは，「だれが来るか」という，いわゆる説明要求の問いに対してどのように答えるかということであると考えられる。この種のものを，仮に「こと・不定型」と呼ぶ。実例，

31　片野夫婦が東京で何をして暮してきたかは詳らかでない。（中山義秀「厚物咲」）

32　おまえはわしに世にあらわれざる節婦がいかなるものかを教えてくれたぞ。（「日本婦道記」）

33　けれども彼があの女の室に入った時，二人の間に何んな談話が交換されたかに就いて，彼は遂に何事をも語らなかった。（「行人」）

先に示した例のうち9，14，17，18（前者），19（後者）もこの型の例である。この型は，疑問語を含む「～か」（以下「（疑問語）～か」で示す。）の形をとるのが普通である。

なお，最近，この「（疑問語）～か」の後に「どうか」「否か」などを付ける言い方にしばしば接するが，このような言い方が伝統的に存在したものかどうか，疑問なしとしない。

Ⅳ　もの・例示型

例えば，

・太郎だったかが来た。

という文の「太郎だったか」の意味内容は，「（それは）太郎だったか」という判定要求の問い又はそれに対する答えというよりは，「（それは）太郎だったか（どうか確かでないが，ともかくその人と思われるある人）」というに近いであろう。この種のものを，仮に「もの・例示型」と呼ぶ。実例，

34　富岡は，「罪と罰」だったかのなかの，～ドストエフスキーの言葉を思い出して，～（林芙美子「浮

雲」)

35　～その日でしたかに芳賀博士あたりがおいでになったり，～（「漱石の思ひ出」）

36　たしか十一歳のときかに欣之助が～（「日本婦道記」）

37　酒匂は工業倶楽部だったか，赤坂だったかで，新東工の社長だという千波に紹介されたことがあった。（曽野綾子「二十一歳の父」）

38　いくつか能く知らんが大方六つか七つかだろう。（「吾輩は猫である」）

39　水島か誰かがそれとなく奥村氏に注意したのか。（高見順「或るリベラリスト」）

40　母は昔もの丈あって宅にある岩国か何処かで出来る麻の蚊帳の方を覚えていた。（「行人」）

この型のとり得る形としては，次の三つが挙げられる。(1)「～か」，(2)「～か～か」，(3)「～か何か（だれか，どこか）」。34，35，36は(1)の例，37，38，また，先に示した11は(2)の例，39，40，また，先に示した20は(3)の例である。

なお，この型で用いられる「～か」は，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの型の場合と違って，具体的には，「体言＋でしたか」「体言＋だったか」「体言＋ですか」「体言＋か」(注7)の形に限られるようである。次のⅤ，Ⅵの型でも，同様のことがいえる。

ただし，(1)としては，「体言＋か」はあまり自由に使えない。

Ⅴ　もの・選択型

例えば，

・太郎か花子かが来る。

という文の「太郎か花子か」の意味内容は，「(それは) 太郎か花子か」という選択要求の問い又はそれに対する答えというよりは，「(それは) 太郎（である）か花子（である）か（確かでないが，ともかくそのうちのいずれかの人）」というに近いであろう。この種のものを，仮に「もの・選択型」と呼ぶ。実例，

41　それは年に三回か四回かに分けて郵便局でうけとるので，～（阿部昭「大いなる日々」）

この型では，「～か～か」の形がとられるのが普通である。この形は，「もの・例示型」の(2)と同じであるが，そのどちらであるかの判断は，前後の状況によることになる。

Ⅵ　もの・不定型

例えば，

・だれかが来る。

という文の「だれか」の意味内容は，「(それは) だれ（である）か」という説明要求の問い又はそれに対する答えというよりは，「だれ（である）か（確かでないが，ともかくある人）」というに近いであろう。この種のものを，仮に「もの・不定型」と呼ぶ。実例，

42　そのような手紙をどの軍艦だったかが玄海あたりでひらいたんじゃなかったんですか。（平林たい子「かういふ女」）

43　～どうしたはずみかに，急に二人の関係が深い処へ突きすすんでしまったのは，～（船橋聖一「ダイヴィング」）

44　また男の学生のなかでの，不良がかかっている誰かが，彼女等に話しかけた。（伊藤整「海の見える町」）

45　ただ，軍人で一生のうちの何分の一かを海の上で暮らしたおやじには，～（「大いなる日々」）

先に示した4，12，13もこの型の例である。この型は，「(疑問語) ～か」の形をとるのが普通である。

よくこの型の例としても用いられる「何か」「だれか」「どこか」などは，慣用化が激しく，全体として体言相当というより，体言そのものに近付いているようにも見える。

46　早ければ今日のうち，おそくとも二，三日うちには誰かさんはこの土地から消えて失くなりますよ。（山本周五郎「おしゃべり物語」）

のように，体言に付く接尾語を下接させた例も現れている。44も，「(不良がかっている誰) か」という構造ではなく，「不良がかっている誰か」という構造のものとして書かれた可能性が強い。ただ，このような傾向をもとに「何か」「だれか」などを単純に体言として処理してしまうこと(注8)については，文節末又は文節中の「か」の用法の体系性を見失うことにもなりかねないので，慎重である必要がある。ちなみに，45は，明らかに「(一生のうちの何分の一) か」という構造であると考えられる。

五

「～か」又は「～か～か」の慣用的な用法のうちには，先に掲げた類型のどこに位置付けてよいか判断に迷うものがある。その主なものについて考えてみる。

a　あるかなきかに

例えば，

47　いかにも優雅に煙は昇った。あるかなきかに立ち迷うた。（三島由紀夫「煙草」）

のように使う「あるかなきかに」は，「あるかないか分からないくらいに目立たない様子で」といった意味であるが，強いて「あるかなきか」の部分だけを取り出して問題にするとすれば，「こと・選択型」の例ということになりそうである。ただ，この場合，選択要求の問い又はそれに対する答えそのものが問題になっているのでは

なく，最初から「そのどちらとも決めかねる」という意味あいが強調されている点，特異といわなければならない。もっとも，この形には，古風な感じがあるのは否めない。

b　するかしないかに

例えば，

48　かれの命令がおわるかおわらないかに，～兵士たちがいっせいに体をのばし，～人びとを狩り集めはじめた。（開高健「流亡記」）

のように使う「するかしないかに」は，「したかしないか，そのどちらとも決めかねる際どいときに」というような意味であるが，「あるかなきかに」についてとほとんど同様のことがいえるであろう。

なお，「あるかなきかに」「するかしないかに」で，それぞれ「～様子で」「～ときに」の意味あいが生まれるのは，主に助詞「に」の働きによるものと思われる。

c　～かのようだ

例えば，

49　彼の視野のなかで消散したり凝聚したりしていた風景は，ある瞬間それが実に親しい風景だったかのように，～見えはじめる。（「ある心の風景」）

のように用いる「～かのようだ」は，「～かどうか確かでない（疑わしい）が，ちょうどそれと似た様子だ」というほどの意味であって，「～か」の部分だけについていえば，やはり「こと・判定型」の例と見なすことが可能であろう。ただし，「～か」の後に，他に見られない微妙な意味あいが感じられる点，やはり特異である。また，この形では，普通の「こと・判定型」の例の場合と違って，「～か」の後に「どうか」を付けることができない。

更に，この形では，「か」が「であるか」相当の「か」となることができない。したがって，例えば，「この大学の学生かのように」ではなく，「この大学の学生で（でも）あるかのように」といわなければならない。

これと似た形として，「～かのごとくだ」「～かの観がある」「～かに見える」などがある。実例，

50　自分の過失であるかのごとく吹聴していた。（「坊つちやん」）

51　病院生活の後半期は病状が割に平静を保持し，精神は分裂しながらも手は曽て油絵具で成し遂げ得なかったものを切紙によって楽しく成就したかの観がある。（草野心平「実説・智恵子抄」）

52　あるとき，それは成功したかに見えたこともあった。（「大いなる日々」）

d　～かもしれない

例えば，

53　もしそれが真実だとすれば，ことによると良人は帰参がかなうかも知れぬ，～（「日本婦道記」）

のように用いる「～かもしれない」の「～か」も，「知れる」がまだ死語になりきっていない以上，「こと・判定型」の例と見ることが可能であろう。この場合においても，やはり，普通の「こと・判定型」の例の場合と違って，「～か」の後に「どうか」を付けることがない。

この形に関しては，一般に行われているように「かもしれない」を複合辞扱いすることの妥当性，前稿で触れた「（疑問語）～かしれない」との関係，「～かもわからない」との関係など，検討すべきことが少なくないが，ここでは詳しく論じないこととする。

六

文節中の「か」によってまとめられた語句は，大体，文中で一体言相当の資格で用いられているとはいえ，松下大三郎氏が，「一度断句になったものを一名詞として扱っている」(注9) と述べているように，もともと文相当の挿入句の変質したものであり，構文論上，普通の名詞節とは異なる点を含むものであることが予想される。以下に，そのような点の主なものを挙げてみる。

a　既に触れたように，文節中の「か」によってまとめられた語句「～か」は，一つだけでも体言相当語句となり得るが，二つ以上が有機的に並べられて，全体として一つの体言相当語句を構成する場合も少なくない。このようなことは，普通の名詞節ではあまり見られないことであろう。

b　名詞節又は連体修飾節中には，題目「～は」は普通現れないとされているが，「～か」又は「～か～か」（「こと型」）の場合は，前方に題目「～は」を伴って，その全体で一体言相当の扱いを受けることがある。実例，

54　その事件も事件ながら，その前に，何故夏というのに私は風邪をひいていたかを言わねばなりません。（曽野綾子「遠来の客」）

55　で，私は彼のことをしつこく訊くことにした。～鮭は土地では「サケ」というか「シャケ」というか，どうして獲るか，何時獲るか，どうして食べるかで三十分は過ごせる。（大岡昇平「俘虜記」）

このような例はやや特殊な例といえるかもしれないが，少なくとも語法的に許されない言い方でない点は，見落とすべきではないであろう。

c　名詞節又は連体修飾節中には，ムードを表す「だろう」などは普通現れないとされているが，「～か」又は「～か～か」（「こと型」）の内部にはこれが現れることがある。実例，

56　そうして其所に書いてある特徴と条件丈で果し

て満足な結果が実際に得られるだろうか何うかを確かめた。（夏目漱石「彼岸過迄」）

このような例も，それほど多いとはいえない。

三上章氏は，この種の用例を誤用であるとしている。(注10) しかし，体言相当の「～か」又は「～か～か」が，挿入句的性格を色濃く残す，文節末の「か」による「～か」又は「～か～か」とつながりの強いものであることを考え合わせると，このような例が存在することは理解できないことではない。

d　名詞節又は連体修飾節中で普通に見られる，主格の「の」は，体言相当の「～か」又は「～か～か」の内部ではあまり使われない。

57　じゃあ大阪へ着き次第其処へ電話を掛ければ君の居るか居ないかは，すぐ分るんだね。（「行人」）

のような例もないわけではないが，やや古風な感じがするのは否定できないであろう。

七

以上，文節中の「か」が，文節末の「か」と強いつながりをもつものであると同時に，それとはまた異なる性格を帯びるに至ったものであることを見てきた。

前稿及び本稿の考察をもとに，終助詞の「か」，副助詞の「か」，並立助詞の「か」の関係を図式的に示すとすれば，おおよそ次のようになるであろう。↔は，それを挟む両者が互いに境界を接するものであることを示す。

a　文末の「か」……終助詞の「か」
↕
b　文節末（文中）の「か」
↕
c　文節中の「か」　}……副助詞の「か」
↕
d　並列語句の間の「か」……並立助詞の「か」

注1　『辻村敏樹教授古稀記念論文集』（印刷中）所収。

2　現実には，三つ以上の「～か」が組み合わせられる場合もあり得るが，便宜上この形で代表させることとする。

3　「何か」のように，活用語以外の語に付いた「か」は，本来「であるか」相当であると考えられる。

4　18，19の例は，見かけ上，共に「～か～か～か」の形をとっているが，そのまとまり方は，「〔(～か～か)〕くらい」「〔(～か～か)（～か)〕さえ」のような構造になっていると考えられる。この〔　〕の部分は，どちらも全体として広い意味で一体言相当になっているに相違ないが，その内部の二つの（　）の部分相互の関係は，単なる羅列の関係に過ぎないといえる。本稿では，18，19の〔　〕のような部分の全体を一つの単位として検討の対象とすることはしない。

5　「判定要求」「選択要求」「説明要求」の考え方と用語は，宮地裕「疑問表現をめぐって」（『国語国文』昭和26年9月号），阪倉篤義「上代の疑問表現から」（『国語国文』昭和33年6月）などによる。なお，阪倉氏は，別に「要判定」「要選択」「要説明」の用語も用いられている。

6　益岡隆志・田窪行則『基礎日本語文法』（平成元年）165ページ参照。

7　Ⅳ，Ⅴ，Ⅵの型では，一般に「体言＋であるか」という形は用いられない。このことは，「体言＋か」の「か」が「であるか」相当の「か」であることと関係があるであろう。

「体言＋であるか」に代わる俗な形として，別に，「体言＋だか」がある。ただし，「だか」の品詞論的な扱いについては，別に検討する必要がある。

8　国語辞典の中には，これらを体言扱いにしているものもある。例えば，『新明解国語辞典第三版』（昭和56年）では，「何か」「だれか」が代名詞扱いとなっている。（「いつか」は副詞扱い。）

また，江口正「間接疑問文と数量詞・不定代名詞との類似について―「どうすればいいか（が）わからない」―の分析」（『国語学会平成二年春季大会要旨』平成2年5月）では，「どうすればいいか（が）わからない」の「どうすればいいか」のような部分を間接疑問文と呼んでいるが，「誰か」「何か」は不定代名詞としている。

9　『標準日本口語法』（昭和5年）316ページ

10　『日本語の構文』（昭和38年）83ページ

（用例は，すべて現代仮名遣いによった。）